

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：24303

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K12523

研究課題名（和文）在日コリアン高齢者と韓国人高齢者の抑うつ関連要因の検討

研究課題名（英文）The Study on Depression Related Factors in Elderly Koreans in Japan and Elderly Koreans in the Republic of Korea

研究代表者

伊藤 尚子（ITO, NAOKO）

京都府立医科大学・医学部・准教授

研究者番号：80456681

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、在日コリアン高齢者と韓国人高齢者の抑うつを引き起こす要因を検討し、保健・医療・福祉の専門家による学際的なグループでの研究を通して、異文化の背景を持つ高齢者の対人援助モデルの開発を試みた。本研究は、在日コリアンと韓国人高齢者を対象に、彼らの居住地域で調査を行った。本研究で得られた知見は、異文化を背景とする高齢者を理解し、支援方法の検討に寄与することが期待される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は収集したデータをもとに、在日コリアンと韓国人高齢者を比較することで、人の移動による高齢化問題という視点で研究を行った点にある。人の移動に伴う精神的健康問題に特化し、その課題をめぐる諸問題や、その要因をあきらかにした。これらは、今後ますます増加が予測される、異文化を背景に持つ対象に対し、対人援助職が対応すべきケアの提供を試みる際に、重要な知見を提供するという学術的意義を持つものである。

研究成果の概要（英文）：The present study examined factors, causing depression among elderly Korean residents in Japan and elderly Koreans in the Republic of Korea, and attempted to develop models of interpersonal support for elderly adults with cross-cultural backgrounds through an interdisciplinary group research by professionals in health, medicine, and social work. This study was conducted through the examination of long-term Korean residents in Japan in a certain area of their residence. The findings of the present research are projected to be employed for the search of ways to understand and support elderly people with cross-cultural backgrounds.

研究分野：地域・在宅看護学

キーワード：異文化 抑うつ 在日コリアン高齢者 エスニックマイノリティ 韓国人高齢者 人の移動

1. 研究開始当初の背景

在日コリアン高齢者の先行研究では、日本人高齢者と比較して、精神的健康が特に第1世代で低く、抑うつ傾向が高いことが明らかになっている。在日コリアン高齢者の第1世代の女性には識字の問題がある。そのため、介護保険などの公的サービスにつなぐりにくいとされている(木下 2016)。また、在日コリアン1世は過去の生活状況が脆弱であったことなどの影響もあることから、同年代の日本人高齢者と比べ健康格差が認められるとされる研究もある(文 2009)。高齢期の精神的健康の保持は、自殺予防に直結するなど、健康支援としても大切な課題といえる。現在、在日コリアン第1世代は、朝鮮半島から幼少期に渡日したケースが大きな割合を占めている。そのため、親世代から受けた文化資本は、韓国人高齢者と類似しているが、日本に渡日し、長期定住したことで、朝鮮半島で高齢者となったものとは、異なる環境に暮らしてきた影響がある。在日コリアンの課題で、これまで明らかになった課題を、朝鮮半島の高齢者と比較することで、その課題が、人の移動に伴う健康問題なのか、朝鮮というエスニシティに特化した健康課題であるのかを明らかにすることができる。

本研究班のメンバーは、在日コリアンや朝鮮半島をキーワードに、在日コリアン高齢者をめぐる新たな動向と、その課題の在り方について知見を積み重ねてきた。研究代表の伊藤は、看護学の教員であり自身も看護職としての就労した経験を生かしつつ、在日コリアン高齢者で、集住地域以外の地域に住む、在日コリアン高齢者の課題を迫りしてきた。その調査の積み重ねは2008年から継続している。本課題の調査として、2008年および、2010年度の東海地区で行われた調査から、在日コリアン高齢者の身体的及び精神的QOLを低下させる因子として①朝鮮半島出身者であること、②後期高齢者であること、③転倒の経験があること、④疾病の保持があること(伊藤 2011a 2011b)が明らかとなった。加齢や疾病の保持、転倒など項目は、日本人高齢者と類似する結果となった。しかしながら朝鮮半島出身者であることが身体的及び精神的健康の低下の要因となっていたことを明らかにした。また、2015年研究では、在日コリアン高齢者は家族と同居者が多いにも関わらず、都市在住の日本人独居高齢者と抑うつの程度が同程度であったことや、特に友人と会う、電話等で会話する機会が週1、2回以下の高齢者は、それ以上の高齢者に比べ、抑うつ傾向が高い点について新たな知見を提示した(伊藤 2017)。

また研究分担者で、公衆衛生や疫学の専門家である文は、大阪など集住地域を中心に、行政との対話を重ねながら、自身の持つネットワークを用い、集住地域における、特に百寿者といわれる、超高齢の在日コリアン高齢者の課題に取り組んでいる(文 2017)。また、研究分担者の金は社会福祉学の専門家でもあり、福祉分野の教育者として、韓国での長期的なフィールドワークから韓国の福祉事情(金 2008)についての知見を重ねている。そして、研究分担者の木下は、社会学者で高齢者研究の第一人者として、高齢期の社会学的研究に貢献を重ねている(木下 1997)。

しかし、こうした研究は、在日コリアン独自の課題として、研究が積み重ねられており、国家間の移動による研究課題としては、国内のみならず、海外においても研究の蓄積が進まず、今後の課題となっている。

2. 研究の目的

本研究は、上記のような背景から、(1)在日コリアン及び韓国人高齢者の抑うつの関連因子を可視化させ(2)可視化された関連因子を用い、学際的な研究体制のもとで、異文化を背景にもつ高齢者への保健、医療、福祉の対人援助職者に対して、異文化を背景にする高齢者を支援するためのモデルを開発することである。

研究体制は、看護学、疫学・公衆衛生学など、医療関連の研究者だけでなく、韓国の社会福祉学に精通した研究者や、エイジングを社会学的文脈から、長期にわたり研究してきた社会学者が、メンバーとなることで、人の移動と精神的健康問題を包括的にとらえることができ、実用的ツールとしての支援モデルを開発することができる。

具体的には、在日コリアン高齢者と韓国人高齢者の抑うつの程度を測定し、生活習慣、社会参加状況など、社会経済環境因子との関連を精査したうえで、在日コリアン高齢者と韓国人高齢者間の比較検討を行う。

3. 研究の方法

本研究課題は、在日コリアンを対象に行われた、量的な調査データを用いつつ、在日コリアン介護施設における参与観察や、インタビュー等の質的な調査も同時に実施する。また、研究期間内で韓国における高齢者関連施設で、質的、量的な調査を実施する計画である。

4. 研究成果

本研究課題による研究成果は、学会発表と雑誌論文を合わせて19件の中で発表されている。本報告の成果として、研究期間に行われたこれらの研究成果を概観する。

2017 年度

研究初年度は、研究の全体像を把握するため文献等資料収集を行った。先行研究から、「在日コリアン高齢者の特徴と福祉制度の利用の課題」については、量的にも質的にも研究が発展していたが、全体的に横断研究で、包括的な研究が進んでいないことが明らかになった。在日コリアン高齢者は社会的弱者として示されている事、社会的弱者としての在日コリアン高齢者の支援には、日本人高齢者と異なる介護支援の条件や意味づけがされていることが明らかとなった（伊藤 2017）。文献収集に合わせて、収集した量的データから、研究に関する新しい知見を得ることを目的に、在日コリアン高齢者の抑うつ傾向の関連因子の再分析を行った。結果として、抑うつ傾向者が 47.8%にみられた。抑うつ傾向者は、朝鮮半島で生まれ日本に移民した在日コリアン 1 世高齢者（65.6%）が、日本で生まれた在日コリアン 2 世高齢者（42.0%）に比較して有意に高く、年齢、性別、出生地、治療中の疾患と婚姻状況に関係なく、家族親戚と電話などの間接的なやり取りをする頻度、友人と直接会う頻度、友人と電話など間接的なやり取りをする頻度、外出頻度、また、趣味を楽しむ機会が少ない群ほど抑うつ傾向の割合が有意に高くなる傾向がみられた。在日コリアン高齢者の精神的健康の保持増進のためには、在日コリアン高齢者が家族や友人と交流を持つ機会を作ることや、高齢者が近隣で社会活動を確保できる場所づくりが必要であることが示唆され、この結果は、東海公衆衛生雑誌にて、報告を行った（伊藤 2017）。しかしながら、これらの傾向が、在日コリアン独自の結果なのか、韓国人高齢者と共通する課題であるのかを明らかにするには、比較による再検討の必要がある。そのため、韓国での調査を実施するために、関係機関と研究計画など調整を行った。

2018 年度

韓国の地方都市に位置する A 敬老堂にて参与観察を行った。当日の高齢者の利用数が天候等の理由で少なく、インタビューの協力者の確保が難しかったため、行政担当者のインタビューも実施した。この結果は第 78 回日本公衆衛生学会総会にて報告を行った（伊藤 2018）。韓国の敬老堂で高齢者が過ごすことが、高齢者自身の主体的な活動につながり、抑うつの軽減になる可能性など、新たな知見を報告した。次年度にも再度調査を行う予定で、現地協力者と調整を行った。また在日コリアンについては、介護施設での参与観察や、支援団体とのミーティングを重ねた。

2019 年度

本年は世界的にコロナウイルスの感染が広まり、渡航が中止されたため海外調査予定が延期された。そのため国内調査を中心に実施した。在日コリアン高齢者や介護者に対し、中京地域にある介護施設にて参与観察と聞き取り調査を行った。また、該当高齢者への個別インタビュー調査も実施した。調査の結果から、通称名を使用しながら、分散居住地域で生活する高齢者の精神面を含む生活実践を可視化し、現在の在日コリアン高齢者の老いの課題について「語りの地平」にて論文報告を行った（伊藤 2019）。

2020 年度

国内での調査は、感染症の発生状況を見ながら継続できた。エスニック・グループの定例会議に継続的に参加し参与観察を実施した。また、在日コリアンの通所介護施設に出向き、参与観察を継続した。その成果は文化看護学会第 12 回学術集会にて「マイノリティの記憶を伝える場としての福祉：在日コリアン高齢者ケアを事例に」として報告した（伊藤 2021）。また、老いに伴う課題として認知症とマイノリティの関係を「マイノリティが老いる経験 認知症を抱える在日コリアン高齢者を事例に」として、立教社会学会大会第 2 回大会で報告を行った（伊藤 2021）。それらの調査結果から、同じエスニシティを背景に持つ介護者とのかかわりが、精神的な健康にも関連している可能性があることを示した。

2021 年度・2022 年度

2021 年度は COVID-19 の影響で、海外調査の実施はさらに延期となった。そのため感染症の発生状況を見ながら国内調査を優先して実施した。具体的には、エスニック・グループの定例会議への参加や、高齢者施設での参与観察である。その結果から、介護保険制度の変更が、在日コリアンが利用できる施設を変更させる原因になるなどしたことが、精神的健康に影響を与える要因となっていたことを明らかにした。その結果は、立教社会福祉研究雑誌に「介護保険制度の改正とエスニック・マイノリティ福祉への影響：名古屋の NPO 通所介護施設の事例から」として報告を行った（伊藤 2021）。

2022 年は感染状況がまだ不安定であった。後半より少しずつ改善に向かっているが、調査環境は万全とは言えない。感染状況が満足でない状況でも、国内調査はエスニック・グループの定例会議への参加や、通所介護施設への参与観察を感染の状況を見ながら継続している。本年はフィールドワークで収集したデータを分析し、その成果を第 25 回在日コリアン高齢者生活支援ネットワーク・ハナ研修会及び、第 48 回日本保健医療社会学会大会で報告した。

2023 年度

研究の最終年度にあたる 2023 年度は、感染のため延期となっていた、韓国での海外調査を実施した。具体的には敬老堂、老人大学、老人福祉館でフィールド調査を実施した。その成果を整理し、まとめているところである。また、2021 年度、2022 年度に実施した国内調査をもとに、European Association for Japanese Studies Council Election 2023 にて、「The construction of collective memory and minority caregiving: the case of elderly ethnic Koreans in Japan」(伊藤 2023) として海外に向けて、研究成果を発信した。通所介護施設に独自の意味を重ねた社会背景を示したことで、参加者から高い関心を集めた。

引用文献

- 1) 木下麗子 (2016) 在日コリアン高齢者と日本人高齢者の社会福祉サービスの認知状況等に関する比較調査：外国籍住民の集注地域における CBPR 社会福祉学 56 巻 4 号 p. 37-51
- 2) 文鐘聲 (2009) 在日コリアン高齢者に対するソーシャルワークソーシャルワーク研究 『社会福祉実践の総合研究誌 / ソーシャルワーク研究編集委員会 編 35 (3), 205-212。
- 3) Evaluation of QOL in Elderly Korean Residing in Japan using SF-36v2, N. Ito Korea-China-Japan Nursing Conference, P259-257. 2011a.
- 4) Measures Taken by Non-Profit Organization Offering Nursing Facilities for Elderly Korean Residing in Japan. N. Ito, Y. Okamura, E. Kajita, The 2nd Japan-Korea Joint Conference on Community Health Nursing . p160, 2011b.
- 5) 金永子 (2008) 『韓国の福祉事情』新幹社。
- 6) 木下康仁 (1997) 『ケアと老いの祝福』剋草社。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 伊藤尚子	4. 巻 41
2. 論文標題 介護保険制度の改正とエスニック・マイノリティ福祉への影響 名古屋のNPO介護施設の事例から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立教社会福祉研究	6. 最初と最後の頁 19 - 26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 文鐘聲	4. 巻 5
2. 論文標題 介護老人保健施設を利用する在日コリアン要介護高齢者の教育年数及び識字能力とADLとの関連	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Global Korean Research, 韓国	6. 最初と最後の頁 93 - 113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊藤尚子	4. 巻 Vol.4
2. 論文標題 在日コリアン高齢者の老いと日常の実践 - 通所介護施設選択を事例にして -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 一般社団法人日本ライフストーリー研究所紀要 語りの地平	6. 最初と最後の頁 93 104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤尚子	4. 巻 VOL.3
2. 論文標題 在日コリアン高齢者介護施設の多義的意味	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 語りの地平	6. 最初と最後の頁 85-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 文鐘聲	4. 巻 39
2. 論文標題 在日コリアン超高齢者の社会経済的状況と健康、QOL	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 老年社会科学	6. 最初と最後の頁 66-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 伊藤尚子	4. 巻 5
2. 論文標題 分散居住地域の在日コリアン高齢者の抑うつ傾向に影響する社会との結びつき	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東海公衆衛生雑誌	6. 最初と最後の頁 137-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 伊藤尚子
2. 発表標題 エスニック・マイノリティ福祉の展望 介護保険制度の法改正を事例として
3. 学会等名 第48回日本保健医療社会学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 伊藤尚子
2. 発表標題 マイノリティの記憶を伝える場としての福祉：在日コリアン高齢者ケアを事例に
3. 学会等名 文化看護学会第12回学術集会 (神戸大学バーチャル会場)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊藤尚子
2. 発表標題 マイノリティが老いる経験;認知症を抱える在日コリアン高齢者を事例に
3. 学会等名 立教社会学会大会第2回大会(立教大学Zoom開催)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ITO Naoko
2. 発表標題 Changing Patterns of Support for Elderly Koreans in Japan The case of the senior day care center “Ikoi No Madang” in the Aichi Prefecture
3. 学会等名 2019CGCSEinternationalconference Emerging Trends in Asian Sociology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤尚子
2. 発表標題 韓国敬老堂における高齢者の健康支援にかんする一考察
3. 学会等名 第78回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 文鐘聲
2. 発表標題 在日外国人高齢者における生きがいに関連する要因 在日コリアンと日本人の比較
3. 学会等名 第61回日本老年社会学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤尚子
2. 発表標題 多様化する在日コリアン高齢者介護
3. 学会等名 日本保健医療社会学会大会第44回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 伊藤尚子
2. 発表標題 在日コリアン高齢者介護施設における相互扶助についての考察
3. 学会等名 ライフストーリー研究会 第4回夏季研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 伊藤尚子
2. 発表標題 在日コリアン高齢者の研究
3. 学会等名 第1回社会学研究ワークショップ(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 伊藤尚子
2. 発表標題 在日コリアン高齢者の福祉課題に関する文献レビュー - 2000年から2016年を中心に -
3. 学会等名 日本地域福祉学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 伊藤尚子
2. 発表標題 在日コリアン高齢者のレジリエンス - 在日1世女性高齢者を事例に -
3. 学会等名 東海社会学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 ITO Naoko
2. 発表標題 The construction of collective memory and minority caregiving: the case of elderly ethnic Koreans in Japan
3. 学会等名 European Association for Japanese Studies Council Election 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	木下 康仁 (Kinoshita Yasuhito) (30257159)	聖路加国際大学・大学院看護学研究科・特命教授 (32633)	
研究分担者	金 永子 (KIM Young-ja) (50161550)	四国学院大学・社会福祉学部・教授 (36201)	
研究分担者	文 鐘聲 (Moon Jong-Seong) (50460960)	畿央大学・健康科学部・教授 (34605)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------